

# 「性の神聖」と現代人の「性」をめぐる考察

—丸山敏雄の『夫婦道』を中心として—

丸山敏秋（倫理研究所理事長）

「世の中のすべての幸福は、夫婦という男女一對の、水も漏らさぬかたい結びあいのなかから生み出されてくるのであります」（丸山敏雄）

## はじめに

日本の近未来の最大の課題は、人口急減への対応である。人口統計に基づく未来予測の確度はきわめて高い。このまま出生率（合計特殊出生率）が増加しないかぎり、近年の漸減の傾向は、2040年を過ぎると急減に転じる。2100年には日本の人口が半減する（あるいはそれ以下になる）とも予測されている。

日本の少子化（少産化）は、同時に非常な高齢化を伴い、すでに歪な人口構成比となっている。人口急減が社会に及ぼす負の影響は、政治、経済（生産・雇用）、社会保障（年金・医療・介護）、治安、教育、地域社会等々、あらゆる方面に及ぶ。「そもそも日本は人口過剰なのだから、江戸時代の四千万人くらいに戻ればよい」といった楽観論に与することなどできない。急減への対応は社会システム全体の大変革を意味する。果たしてそれが可能かどうか……。これまでの少子化対策もほとんど功を奏さなかった。出生数の急減を緩和しつつ、それでも確実な人口減少に対応した、計画的な国家の再生が急務とされる。

言うまでもなく人間は、他の動物と同様に、「食」と「性」の二大本能を有する。個体維持のための「食」に対して、「性」は種族の維持を担う。「性」の本能はまた、社会規範の在り方、すなわち倫理道徳とも密接に関わる。多様な「性」の文化の中の規範性、倫理道徳に関わる面を「性の倫理」と呼んでおこう。この「性の倫理」の探究は、多様な文化の基盤に見出せる倫理道徳を統一的に研究する倫理文化学にとっても不可欠な対象領域となる。

敗戦後の日本では「性の解放」や「性の自由」が謳歌され、露骨で猥雑な性情報が氾濫したり、風紀の紊乱が広がった。他方では、「性」に対する偏見を墨守する傾向も依然として残存していた。あるいはまた産児制限に関する新しい法律が施行されたりもした。倫理運動を創始した丸山敏雄（1892～1951）は、いち早く「性の倫理」を説き、それらのどれに対しても「否」と応じて、独自の倫理観を世に問うたのである。以来歳月は流れ、今日では丸山敏雄が予想もしなかったであろう事態が「性」の領域で生じている。

本稿は、丸山敏雄が戦後直ちに執筆した論文『夫婦道』、およびその後提示した「性」に関する論考の内容を吟味した上で、人口減少を引き起こす一因と思われる現代人（とくに若年層）の「性」に対する意識と行動の変化を倫理の面から考察することを目的としている。

ちなみに、英語の「セックス（sex）」は二つに分割された片方を第一義として（プラトンの『饗宴』に書かれている思想）、相対的かつ相補的な雌雄男女の性別や、両性が交わりを希求する本能を意味するようになった。それに対して日本語にも用いられる漢字の「性」は、人間の本性（さが）を原義として、そこから性別や生殖機能（行為）などの意味が派生した。「性の倫理」という場合の「性」は、も

とより sex (あるいは sexuality) の意味であり、そこには「社会的な性 (文化現象としての性)」の意味合いも含まれる。